広島大学　高等教育研究開発センター　大学論集
第 38 集（2006年度）2007年３月発行：171－187

フンボルト理念とは神話だったのか

―パレチェク仮説との対話―

潮　木　守　一

フンボルト理念とは神話だったのか

―パレチェク仮説との対話―

潮　木　守　一*

問題の所在

多くの大学史の教科書は，1810年のベルリン大学の発足をもって，近代的な大学の始まりだと説いている。ところで，ベルリン大学はそれ以前の大学とは，どのような違いを持ち，いかなる独自性を持っていたのだろうか。さらにまたベルリン大学の創設に，大きな影響力を発揮したのは，当時の政治家，高級官僚，言語学者，プロイセン内務省の文教局長であったウィルヘルム・フォン・フンボルトであったという。そのことから，ベルリン大学の創設，それにともなう大学改革をリードしたのは「フンボルト理念」だったという。そしてこの「フンボルト理念」が19世紀のドイツの大学をリードし，それが19世紀後半から20世紀初頭にかけて，ドイツの学問を世界最先端の水準にまで押し上げた原動力だったと説いている。ところで，そもそも「フンボルト理念」とは，具体的にはどのような構想だったのだろうか。

こうした「フンボルト理念」説は，現在では日本ばかりでなく，広く世界各国で通説となり，ほとんどの大学史の著作の中で繰り返されている。ところが近年に至り，フライブルク大学パレチェク教授（Paletschek, Sylvia）によって「フンボルト理念＝神話説」が主張されるようになった[1)]。これは広く世界中に広まった大学史記述に対する根源的な挑戦であり，既成の定説に修正を迫る野心的な企てである。

ただ，かねてからそういう兆しが，まったくなかったわけではない。たとえばベン・ダヴィドは「19世紀初頭の哲学者達の唱えた理念論は，いずれも抽象的な観念論に過ぎず，その理念がドイツの学問をリードしたことはない。むしろ19世紀後半に始まったドイツでの科学革命は，フンボルト達の構想に対する反逆から生じた」としてきた[2)]。果たして「フンボルト理念」は実在したのか，それはどのような影響力を持っていたのか。このテーマは，いつの日かは実証的な検証に付されるべき課題として，これまであった。

このパレチェクの論は，筆者がこれまで行ってきた一連の研究と密接に関係している。筆者はこれまで筆者なりの解釈を提起してきたが，こうした論が登場した現在，筆者は筆者なりの論点整理が必要となった。そこで本論文では，上記の研究成果との対話を通じて，筆者なりの整理を試みることとする。

まずパレチェクの主張する論点を要約するならば，こうなる。「ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの大学構想は，19世紀を通じて誰もその存在を知らず，フンボルト理念，ベルリン・モデルといっ

＊桜美林大学招聘教授

た言説は，少なくとも19世紀に刊行された著書，論文には一度も登場していない。それが頻繁に使われるようになったのは，1910年以降のことである。だから，19世紀後半から20世紀初頭にかけて，ドイツの学問と大学をその頂点に引き上げたのは，フンボルト理念，ベルリン・モデルだったとする言説は，歴史的な事実に根拠づけられていない。1910年とはベルリン大学創立100周年記念に当たり，ベルリン大学の栄光を正統化するためにフンボルトは「発見」されたのであり，「フンボルト理念」はその時創作された神話である。それは，自然科学・技術の発展を前に，地盤沈下の著しい精神科学者の失地回復の願いから作られた言説であり，フンボルトという精神科学の先駆者の功績を賞賛することによって，精神科学の復権を図ろうとする試みのなかから生じた神話であった。それ以降，高等教育政策に関わる知的指導者の間で，大学擁護，学術振興政策推進を正統化する論拠として，フンボルト理念が頻用されることとなった」。

以上が論者の主張の要点であるが，本論文では以下の点に立ち入ってその論点を検討してみることにする。まず本論文では（1）フンボルト理念とは具体的にどのような内容の思想であったのか，(2）いったい日本の大学には「研究を通じての教育」という教育スタイルがどのように伝えられたのか，(3)「フンボルト理念」「ベルリン・モデル」といった言説は，いつ頃から日本に登場したのか，(4）この日本への波及は，パレチェク仮説を支持することになるか否か，という 4 点にしぼる。序論として，そもそもベルリン大学とは，どのような時代背景のもとで創設されたのか，フンボルトはどういう大学構想を抱いていたのか，その点を確認することから出発しよう。

フンボルト以前の大学は，どのような状況にあったのか

現代の大学史研究者であるモーラフ（Peter Moraw）は[3]，1800年直前のドイツの大学の特徴を，「秩禄大学」(Pfrüendeuniversität）と「親族大学」(Familienuniversität）の 2 つのキーワードで説明し，こうした状態に陥っていた大学を改革することが，ベルリン大学創設の背景であり，「フンボルト理念」の目標だったとしている。それではモーラフは，この「秩禄大学」,「親族大学」という用語を，どのような意味で用いたのであろうか。この問いに答えることは，同時に「フンボルト以前」の大学がどのような状況に陥っていたのか，を問うことと同じである。それはいったい，どのような状態に陥っていたのであろうか。

まず秩禄という言葉であるが，それは統治機構，教会組織のなかで何らかの役職につき，その職務を果たす代償として与えられる土地のことで，役職者はこの秩禄で生計を維持していた。かつての日本でも，封建時代の武士はそれぞれの地位，身分に応じて石高が定められており，それで一家眷族を養っていた。それと同様，18世紀までの大学教授には，国王，領主，教会など大学のパトロンから土地，領土，荘園などが秩禄という形で与えられ，そこから生じる収入をもとに教授一族の生活が維持されていた[4]。

こうした固定給が保障された教授職は，魅力的なポジションであるため，いったん教授の座を獲得した者は，よほどのことがなければ手放そうとはしなかった。また自分が引退する時には，そのポストをできるだけ我が子，あるいは親族，友人に譲ろうとした。モーラフのいう親族大学とは，

こうした中から出現した。つまり各地の大学は，ごく限られた一族が教授職を独占し，それを専有する事態が発生した。さらには教授職が売買の対象にさえなったという。

一旦こういうサイクルが働きだすと，教授選考は学問上の業績ではなく，情実，縁故によって行われることなる。その結果，大学は一握りの家族・親族による家族経営体になり，学問的貢献よりも，一家一族の利害のほうが優先することになる。その結果，大学は次第に学問の場ではなく，一族で継承する家業となり，既得権擁護の場と化した。

フンボルトが克服しようとしたのは，こうした「秩禄大学」であり，「親族大学」であった。こうした大学を改革するために，フンボルトはそれまで大学に認められていた教授の選考権を，政府に引き上げようとした。なぜそうしたのか，その理由は改めて述べるまでもなかろう。フンボルトは「ベルリンにおける高等教育機関の内的・外的構造」（以下では構造論文のする）という論文のなかで，「アカデミー会員の選考はアカデミー会員に任せてもよいが，教授の選考権は大学に渡すべきではない」といっている。そしてその理由として，「大学には内部対立と軋轢がつきものだから」といい，「大学は優れた人物を集めながら，次第に彼等を枠に中に閉じ込めてしまう」といっている。

確かにフンボルトは「構造論文」のなかで「政府は大学にあまり干渉すべきではない。大学に任せておいたほうが，はるかにうまくことが運ぶ」ともいっている。そのために，後世の大学人は，この一節をもとにフンボルトを「大学自治の守護者」の地位に祭り上げようとした。しかしこと教授選考に関しては，彼は大学を信用しなかった。事実，ベルリン大学の創設時の教授人事は，ほとんど国家官僚，貴族官僚によって行われたという。

それではフンボルトは「親族大学・秩禄大学」に代わるものとして，いかなる大学を目指したのであろうか。「フンボルト理念」として，もっとも頻繁に語られるのが，「研究中心主義」である。つまり大学の任務は教育ではなく，研究にあるとする論である。フンボルトは「構造論文」のなかで，「知識をいまだ発見されていないもの，たえず研究されるべき対象として追求せよ」といっている。この一節がフンボルトの研究中心主義を表明した箇所として，これまでもしばしば引用されてきた。しかし問題はその解釈の仕方にある。これまで多くの場合，「大学の教師は，ただ教えるだけでなく，研究をしなければならない。自分で研究したその成果を発表する場が，教室である。それが教育と研究の統一である」，と解釈されてきた。

しかし，この解釈では研究をするのは教師だけである。この解釈はフンボルトの構想の一面しか把握していない。フンボルトは教師だけでなく，学生に向かっても研究をせよといっている。つまり「すべての知識をいまだに解決しないもの」として扱うのは，教師だけでなく，学生もそうしなければならないと彼はいう。つまりフンボルトの頭のなかにあったのは，教師ばかりでなく学生もまた，新たな知識を求めて研究を続ける，一種の知的コミューンであった。そこでは教える者と学ぶ者との間には，決定的な違いがあるわけではない。多少の差はあるとしても，新たな知識を求める点では，ともに同列に立っている。ここには「学ぶ学生」ではなく，「研究をする学生」という新たな考え方が登場している。つまり学生は学ぶためにだけ大学にいるのではなく，研究をするために大学にいるのだという考え方である。

ただこのような解釈は，現代ではさまざまな論議を呼ぶことだろう。「学生に研究をやらせると

いっても，無理ではないか。フンボルト理念とは，しょせん学問好きな啓蒙貴族官僚が頭の中に描いた幻想にすぎない。その当時からすでに現実離れした論だったはずである」。この問題について，筆者自身の理解のしかたは，すでにいくつかの箇所で書いているので，ここでは繰り返さない。ここでは，あくまでも「フンボルト理念」「ベルリン・モデル」という言説に着目して，それがいかにして登場して，いかなる役割を演じたのかに焦点をしぼる。

ところで，これほどしばしば引用される「ベルリンにおける高等教育機関の内的・外的構造」という論文は，どういう性格のものだったのであろうか。フンボルトがこの論文を書いたのは1809年から1810年にかけてのことと推定されているが，正確な執筆期日は書き込まれていない。しかもこの論文はごく短い，しかも未完成の草稿にすぎない。この草稿が発見され，世間の目に触れるようになったのは，1900年以降のことで，全文が完全な形で公刊されたのは，1903年のことである。この年，Bruno Gebhardtによって編纂された「フンボルト政治論文集」が刊行され，初めて世に知られた[5)]。つまりこの「構造論文」は約100年間倉庫の中で眠っていたことになる。

この事実をもとに，フライブルク大学の（2001年当時はチュービンゲン大学）のシルヴィア・パレチェク（Syvia Paletschek）教授は，「フンボルト理念不在論」，「ベルリン・モデル不在論」を提起した。このフンボルトの論文が「発見」されたのは，1900年のことで，19世紀の間は，誰もフンボルトのこの論文の存在を知らなかったという。また大学問題を論じる場合，このフンボルト論文を典拠としてあげる例はまったくなかったという。さらに教授は，以下のような諸項目を挙げて，「ベルリン・モデル不在論」を展開している[6)]。

パレチェクの「ベルリン・モデル」不在論

まず1810年に創設されたベルリン大学は，どれだけ意図的に，それ以前の諸大学とは異なった性格を備えた大学として構想されたのか，という点である。つまり，発足時のベルリン大学はそれまでの大学とくらべて，どれほど革新性を持っていたのか，という点である。この点を検討する素材として，パレチェクは創設当初のベルリン大学の学則と，それが決定された経緯を検討している。

試みに「ベルリン大学規定」(1816年起草)を参照すると，第一条の目的規定は，「この大学の目的は，他の大学と同じである。つまり青少年に対して，講義・演習などの方法を通じて，一般的，あるいは特別な学問的な教育を与え，さまざまな分野の上級な国家での職務，教会での職務などに，容易に就くことができるように教育することである。またこの大学には，他の大学に与えられている諸特権が与えられる」となっている。つまりパレチェクによれば，この目的規定には，なんらの独自性がなく，国家官僚（法学部），聖職者（神学部）の養成を目的とするという従来通りの規定となっている。ましてや研究重視といった痕跡は，まったく見られない。

パレチェクはまた，19世紀に刊行された法律教科書や百科事典を対象に，フンボルトの名前が引用されている例があるのか，ベルリン大学がモデルとされている例があるのかどうかを点検している。つまり「ベルリン・モデル」，「フンボルト理念」といった言葉が，どの程度，同時代人に知られていたのかを確認しようとしている。その結果によると，シュライエルマッヒャー，フィヒテ，

シュテッフェンスなどの名前は登場してくるが，フンボルトの名前はまったく登場してこないという。また19世紀前半の百科事典では，重要な大学改革の事例としてベルリン大学が挙げられる事例はなく，むしろゲッチンゲン大学とハレ大学での改革だとしている。

ただひとつベルリン大学には，従来までの大学と決定的に異なる点があった事実を，パレチェクも認めている。それはベルリン大学の財政基盤である。パレチェクは，ベルリン大学の財政基盤については，フンボルトの初期の構想が実現されなかった事実を指摘している。フンボルトは，これまでの伝統通り，大学の基本資産として国有地，秩禄を付与し，大学の財政面での安定性を確保しようとしていた。ただしこれはベルリン大学に限ったことではなく，その当時の大学の設立方式としては，ごく一般的な方式であった。

ところが，こうしたフンボルトの初期の構想は実現されなかった。ベルリン大学は，固定資産を欠いた，毎年の国家予算に依存する，財政的にはきわめて不安定な大学として創設された。それが政策的意図的なものだったのか[7]，それとも対ナポレオン戦争での敗北という，緊縮財政下での創設という時代事情が原因だったのかは，今後の検証が必要であろう。ただベルリン大学をきっかけとして，この方式が他大学にも波及していった。その意味ではベルリン大学は「国営大学」の嚆矢だったことになる。

研究大学の登場

次に検討されるべきは，ベルリン大学は創設当初から「研究大学」を目標として創設されたのかどうかという点である。フンボルトが「構造論文」のなかで主張した「知識を未完成のものとして扱え」という構想が，ベルリン大学のなかでどのように具体化されたのかという点である。すでに述べたように，ベルリン大学の目的規定には「研究重視」「研究中心主義」といった規定はまったく発見できない。

そもそも「研究大学」（Research University）という用語はアメリカで作られた用語で，ドイツ語圏ではそれに対応する用語はない。ドイツ語圏ではUniversitätとは，研究機能を併せもった教育機関であることは自明のことである。それに対して，種々様々なタイプの大学，カレッジの混在するアメリカでは，博士課程までそなえた一部の大学が，他の大学との相違を強調するために，作り出した用語がこれである。しかもアメリカの研究者は「研究大学」を「研究と教育との統一の場」としてではなく，むしろ両者が「対立」する場ととらえ，その問題をいかに克服するかという課題意識をもとに，このテーマを論じてきた。筆者の30歳代までは，「研究と教育の統一」という言葉は，日本ではきわめて頻繁に用いられ，しかもそれは自明のこととして扱われていた。筆者の研究関心はむしろ，こうした言説に対する疑問から始まった。当時筆者の眼前に繰り広げられている実態は，「教育と研究の統一」という言説とは，およそかけ離れた光景だった。なぜそれにも関わらず，言説だけが飛び交うのか。これが筆者の抱いた疑問であった。

こうした筆者の漠然とした疑問に，明確な言語化のきっかけを与えてくれたのは，ヴェイセイ，ホーキンス，ベン・ダビッドなどの英語圏の研究者であった。なかでもベン・ダビッドは，研究と

教育とが両立し難いのは，双方が互いに時間・エネルギーを食い合うといった外的な理由からではなく，もっと本質的な対立があるとしている。つまり「教えることのできる知識は，もはや研究を必要としない。まだ研究が必要な知識は教えることができない」と，研究と教育とが，本質的に対立関係にあることを指摘していた[8)]。

こうした事例が示すように,「教育と研究との統一」という言説が自明のこととされているなかで,アメリカの研究者達は「教育と研究との対立」をとらえ,それをいかに克服するかを論議していた。筆者にとっては「研究大学」とは目指すべき理想というよりも，近代大学の宿命的な課題を抱え込んだ存在であった。

研究中心主義の登場

ベルリン大学が「研究大学」の嚆矢であったか否かを検証するには，いかなる方法があるのか。パレチェクが採用しているのは，(1)「研究を通じての教育」が具体的に行われたゼミナール，実験室という物的施設の登場と，(2) その内部で行われた具体的な教育方法の検証，(3) 研究業績による教員採用方式の登場，そして (4) 実際の教授人事に見られる業績原理の浸透，などである。

まず「学生を研究させながら教育する」となると，そのための特別の施設が必要となる。具体的にいえば，文系の場合には，図書室と演習室とを一体化した空間が必要である。たとえば，歴史学を例にとれば，基本史料，基本文献を網羅的に収集した図書室が必要であり，学生を交えた演習をその図書室のなかで行う必要がある。この図書室に蓄積された史料，文献を使いながら，教授も学生もともに研究を行う。そしてその研究成果をそのゼミナール室で発表し合い，途中で疑問点がでてくれば，すぐ出典に当たり，参考文献を検証しながら，その場その場で知識を確定してゆく。それが「研究と教育の統一」の具体的な姿である。

そこで行われているのは，教壇の上からの教師による一方的な講義ではない。学生もまた最先端の知識を確証する過程に参加することになる。ちなみにフンボルトは「大学での教師と生徒との関係は，それまでの学校とは違って，両方とも知識の前では同格である」といっている。筆者はこれを「知的コミューン」と形容してきた[9)]。

自然科学の場合には，学生を研究過程に参加させながら教育するためには，実験室が不可欠である。現在でこそ実験室教育は当然のことであるが，1810年のベルリン大学創設当時，それはけっして当然のことではなかった。ドイツの大学ではじめて大学内の施設として化学実験室が設けられたのは，ギーセン大学のリービヒ教授のもとで，それはベルリン大学創設後，10年数年後の1825年のことであった。ベルリン大学での化学実験室の創設は，ギーセンよりもはるか後，1867年のことであった[10)]。リービヒ教授は，基本的な知識をごく短期間に講義で伝えると，学生を次々に実験室に投入し，学生に実験をさせながら教育したとされている。まさしくそこでは教育と研究の統一が行われた。

19世紀のドイツの大学が，次々とゼミナール室，実験室を整備してゆき，そこに一種の「研究工房」が作り出されたことは,これまで多くの人々によって指摘されてきた。ここを拠点として教師・

学生を交えた研究活動が集約的に展開され，それがドイツの大学の研究水準を押し上げたことは，異論の余地がない。たとえば，大学史の古典とされるディルセーの「大学史」では「ベルリンで絢爛たる成功に飾られたものとして，ドイツ語の「ゼミナール」が上げられる」としている[11)]。彼は「19世紀初頭における政治的衝撃」の章を，もっぱら「ベルリン・モデル」「フンボルト理念」というパラダイムに従って記述している。それは1933年に刊行されたからである。

問題はそれがベルリン大学からはじまったのか，フンボルトの構想がこうした独特な教育方式を生んだのかに絞られることになる。今から振り返ってみると，「近代大学の形成と変容」（1974）執筆当時の筆者にとって，ゼミナール体制，実験室体制の成立は大きなテーマであった。しかしその当時は，依拠すべき文献が少なく，わずかに国立国会図書館に所蔵されていた「ベルリン大学規則集」（1887）を手がかりにするしかなかった[12)]。この規定集には1812年以降，1880年代までに設置されたゼミナール，実験室についての規定が収録されていた。ところが，その内容を追ってゆくと，初期の規定と後期の規定とでは内容が違うという事実に気がついた。つまり，初期のゼミナール規定は，そこでの教育方式を定めているのに，後期になればなるほど，むしろ施設管理についての条文が多くなる。これは筆者にとっては，一つの新しい発見であった。この事実をもとに筆者は，教育方式として始まったゼミナール，実験室が，19世紀をかけて教育方式としてではなく，研究施設へと変質していった，という仮説を立てた。

その後，まもなくこの仮説を立証する研究がドイツで刊行された。それがリーゼ（Riese,Reinhard）の「巨大学問企業へ変質する大学」（1977）である[13)]。この著書はベルリン大学ではなく，ハイデルベルク大学を中心に南ドイツの大学に残された原資料をもとに分析しており，ある意味では「ベルリン・モデル」への修正といえる面を持っている。つまりゼミナール室，実験室の設置，整備は，ベルリン大学だけでなく，他の大学でも同時並行的に進められていたことを明らかにしている。

ベルリン大学でのゼミナールの登場

ベルリン大学では1812年，「古典語ゼミナール」と，「神学セミナール」が最初のゼミナールとして設置されている。筆者はこうした事実をもとに，ベルリン大学では創設当初から「研究を通じての教育」を実現する試みが展開されたと理解してきたが[14)]，パレチェクの理解はそうではない。「19世紀全般をかけて，ドイツの各地の大学にはゼミナール教育，実験室教育が定着していったが，それはさまざまな大学，教授達，国家機構の相互作用の結果で，ベルリン大学がリードしたわけではない。」としている。

ドイツの大学で，ゼミナール室，実験室が，いつどの大学に設置されていったか。その実態は，個別大学ごとに原資料に当たりながら確定してゆくしかない。すべての歴史研究がそうであるように，今後もさらに個別大学史の発掘作業ともに，整備され，修正されてゆくことであろう。そのなかで，ベルリン大学が先駆者であったのかどうかも検証されることになろう。

このように，大学の規定をみても「研究」が明記されておらず，ゼミナール教育，実験室教育もベルリン大学が先駆的な役割を果たした形跡がないとしたら，残るチェック項目は，教授人事にお

ける業績主義の導入である。ベルリン大学での業績原理の導入は，どのように行われたのか，はたしてベルリン大学は業績原理の導入という次元で，他のドイツの大学をリードしたのであろうか。これがパレチェクの設定する課題である。

この事項のなかで検討されるテーマは２つある。第一は教授資格試験制度（Habilitation）の成立であり，第二は個々の教授人事の際に，どれだけ，またどのような形で業績基準が具体的な形で用いられたかである。第一の項目を検討してみよう。長年ドイツの学問水準を高め，それを維持してきたのは，博士号取得後，さらに研究を蓄積し，博士論文以上の学問的業績をあげなければ，教授資格が取れないという教授資格試験（Habilitation）の制度があったからだとされてきた。

この教授資格試験制度の導入こそ，18世紀までの大学を支配してきた「親族大学」「秩禄大学」といった血縁主義，情実主義を払拭し，それに代わって業績主義への移行を決定づけた画期的な制度であった。それは血縁主義から業績原理への転換点を象徴する制度であった。はたしてベルリン大学はこの制度導入面で，他大学をリードしたのであろうか。

パレチェクの解答は，ここでも否定的である。ベルリン大学は教授資格試験を導入した最初の大学ではなく，すでにベルリン大学に先立って，インゴルシュタット，ハレ，ハイデルベルク大学で実施されていたと説く。たしかにベルリン大学もまた教授資格試験についての規定は持っていたが，その具体的な実施方式は，少なくとも1880年代までは，じゅうぶん定式化されていなかったという[14)]。

パレチェクによれば，この教授資格取得試験が厳しくなったのは，1870年代から80年代にかけてのことで，それはベルリン大学に限ったことではなかった[15)]。ドイツ各地でそういう傾向が目立つようになり，教授資格取得条件が厳しくなった。要するにベルリン大学がとくに厳しい教授資格試験制度を導入したという証拠はなく，ましてや他大学に先駆けたとはいいがたい，というのがパレチェクの結論である。

それでは教育と並んで研究が教師の職務義務となったのは，何時のことなのだろうか。この「研究義務」（Research Imperative）という用語を用いたのは，アメリカの研究者ターナーであり，彼が1971年に発表した「プロイセンにおける研究の職業化　1818〜1848」という論文でそれを使った[16)]。この論文でターナーは，この19世紀初頭の30年間にドイツの大学では，大学教師の職務として「研究義務」が課せられるようになったと説いている。その当時，筆者は「パブリッシュ・オア・ペリッシュ」という言葉が，いったいどこで，いつ頃から使われるようになったのか，あれこれ追跡していた。だいたいアメリカなのか，ドイツなのか，その起源がわからない。その時に，この論文に行き当たった。

ターナーは大学教師の採用，昇進が研究業績に基づいてなされる慣行が成立したのが，まずプロイセンであり，その時代は19世紀前半だと結論づけた。問題はなぜこういう人事慣行が成立したかであるが，筆者は1986年刊行の「ドイツの大学」（講談社学術文庫）のなかで（222〜232頁），教授選考権が教授会から国家官僚に移ったことが，その原因だったという仮説を提起しておいた。その後，マックレランドが同様の仮説を提起している[17)]。

さらにパレチェクは，大学教師を研究者として認識する理解のしかたが，すでに19世紀に存在し

ていたのかどうかを検討している。その証拠を探すために，19世紀に出版された法律辞典，百科辞典を調べている。その結果によると，大学教員の職務はいずれの場合も「教師」と定義されており，研究と定義した例はまったくないという。大学の役割は19世紀の間は「学術に基づいた職業教育」であり，とくに法律と神学という国家に関連する職業訓練が強調されている。

昇進の終着駅としてのベルリン大学

このように，さまざまな基準からみても，ベルリン大学が業績原理を最初に導入した大学であり，それを支えたのが「フンボルト理念」だという証拠は見つけ出しがたい。しかしベルリン大学が，19世紀末にはドイツの学界のセンターとなったことは，否定しがたい事実である。ベルリン大学は，ミュンヒェン，ライプチッヒと並んで，大学教員の終着駅とみなされるようになった。そうなれば，そこの人事には多くの人々の関心が集中する。そうなれば，情実主義，縁故主義が入る余地がなくなる。教授の選考基準は学術上の業績にならざるを得ない。つまりベルリン大学が特別に業績主義を掲げなくとも，著名教授が集まるようになる。それは決して「ベルリン・モデル」の結果ではない。ベルリンの土地柄がもたらした結果に他ならない。これがパレチェクの結論である。

かくしてベルリン大学には，ドイツ最高の学者が集まる大学となった。それは業績主義の輝かしい勝利のように見える。しかしその背後には新たに，業績主義に対立する傾向が作り出されたという点が，筆者のこれまでの理解のしかたで，そのことは「ドイツの大学」，「ドイツ近代科学を支えた官僚」で指摘してきた。この点はパレチェクが触れていない点なので，若干解説しておきたい。

すでに「ドイツの大学」で述べたように，ドイツでは教授人事の最終決定権は大学側にあったのではなく，文部省にあった[18]。学部教授会が持っていたのは，３名の候補者リストを提出する提案権だけで，そのなかの誰を教授に任命するかは，文部大臣の決定事項であった。しかし次々に提案される教授人事を文部大臣だけで決められるわけはない。当然のことながら，高級官僚と相談する。その高級官僚もまた，自分だけでは決められない。当然のことながら，誰かに相談する。相談するとすれば，文部省に一番近いベルリン大学の教授ということになる。

かくしてここにベルリン大学教授が，ドイツの学界の頂点に君臨する構図が出来上がる。ウェーバーが言ったように，ベルリン大学は「文部省のドアが近すぎた」[19]。ドイツの経済学，歴史学の教授人事で，シュモラー（ベルリン大学教授）との相談抜きに行われた人事は，ひとつもなかったとされている。また医学部の教授人事のなかで，キュルツ教授（ベルリン大学教授）との相談なしに行われた人事はひとつもなかったという。

問題は，これをもって業績原理の勝利といえるかどうかである。これこそ新たな情実原理，人脈原理の復活だったのではなかろうか。これこそ，新たなタイプの「親族大学」，「秩禄大学」の復活だったのではなかろうか。ウェーバーの「理念型」という認識方法論は，社会科学のなかで特異は地位を占めている。ウェーバーの理念型の独自性は，あるタイプの原理が純粋にそのままの形で展開してゆくと，必ず最後には否定しようとした反対の原理が，ふたたび姿を現すというパラドクスを含んでいる点である。複雑な人間の行為を理解するには，ウェーバー流の「理念型」は有効性が高い。

ただ以上はあくまでも筆者の理解のしかたであって，パレチェクの結論は違う。パレチェクはここでバウムガルテンの分析結果をもとに，ベルリン，ボン，ハイデルベルクなどの著名大学だけに，著名教授が集中したわけではないとしている。つまり「ベルリン大学一人勝ち説」はあたらないというのが，その結論である。

以上のような検討結果をもとに，パレチェクはこう結論づける。1910年に行われたベルリン大学創立100周年記念祭は，ベルリン大学の成功物語を必要としていた。ベルリン大学の成功を根拠づける正当な理論，哲学を必要としていた。この年，ベルリン大学の私講師シュプランガー（Eduard Spranger）は「ヴィルヘルム・フォン・フンボルトと教育改革」を出版した。1882年生まれの彼はその当時，28歳の青年教師であった。この本のなかでシュプランガーは，公刊されたばかりのフンボルト全集に依拠して（1903年），ドイツの歴史上初めてフンボルトの業績を紹介し，その功績を高く評価した[20)]。

ベルリン大学の成功は，同時にドイツ帝国の成功と表裏一体となって語られた。シュプランガーの著書には，次のような言説が散りばめられている。「学問の理想を具体的に実現するための組織は，近代国家によって作られる必要があり，またそれは可能である」，「政治的な自由主義とプロイセン改革，そして国家の形成なくしては，学問の理想は具体的な形をとることができない」，「フンボルトの偉大な業績は，国家と大学とを，自由で，しかも有機的な統一体として組み合わせたことにあった」，「ベルリン大学の創設は，この天才の創造物であり，その影響力はその後も今日にいたるまで，生きた力となって活動し続けている」。

パレチェクはさらにいう。こうした言説は19世紀末から次第に明瞭となってきた自然科学と技術の進歩と勝利を前にして，地盤沈下の著しい精神科学の存在意義を，あらためて再主張する言説でもあったと。ドイツの繁栄をもたらしたのは，自然科学と工学であり，それに比較すれば，精神科学，文化科学は，目にみえる形でその貢献を示すことができない。しかし翻って考えてみれば，学問と大学を擁護し，その存在を正統化し，国家こそが大学・学問の守護神になるべきだと論じたのは「フンボルト理念」だったではないか。フンボルトが研究中心主義を推奨し，「学問の自由」を主張したからこそ，ドイツの大学は世界的権威にまで高められ，ひいてはドイツ帝国の栄光が達成されたのではないか。フンボルトを賞賛し，神聖化することは，精神科学，文化科学の存在意義を強化する上で，欠くことのできないことであった。

1910年以降，「大学の本質」といった類に著書が，相次いで出版されるようになる。たとえば，シュプランガー（1910，1930），ルネ・ケーニヒ（1935），カール・ハインリヒ・ベッカー（1919，1925），ヤスパース（1946），シェルスキー（1963）。これらはいずれもが「フンボルト理念」を正面に掲げ，「ベルリン・モデル」がドイツの大学と学問の栄光をリードしたのだと，くりかえし主張している。

しかしながらパレチェクは，これらの著作はいずれも高等教育政策に関係していた精神科学者か学術政策者達によって書かれたもので，歴史学者によって書かれたものではないという。シュプランガーは哲学者・教育学者，ベッカーは東洋学者・文部大臣，ケーニヒとシェルスキーは社会学者，ヤスパースは哲学者・精神医学者。たしかに歴史学者は一人もいない。

こうして1910年以降,突如として登場した「フンボルト理念」「ベルリン・モデル」といった言説が,その後の大学史の記述の方向性を決定し，その影響力は今日に至るまで続いているのだと説く。これらの言説の頻用者は，いずれも高等教育政策の形成者であり，彼等にとっての課題は，現実の高等教育政策を策定し，あらゆる抵抗勢力と抗争しながら，学問・大学の存在意義を主張し，学術予算，大学予算を獲得することであった。その彼等にとっては，自分達の使っている言説がどれだけ歴史的検証を経たものかは，関心の的にはならなかった。彼等が求めたのは，神格化された，神聖化され，簡単に誰にでも分かる言説であった。こうした過程のなかで，歴史学的検証を経ていない言説が，スローガン化され，神格化された。「フンボルト理念」「ベルリン・モデル」は，こうした過程のなかから，創作されたのである。以上がパレチェクの説である。

日本への「フンボルト理念」「ベルリン・モデル」のインパクト

それでは世界中の教科書は書き換えが必要なのであろうか。それはにわかに決まる問題ではなかろう。今後いかなる反証,反反証が登場するかにかかっている。ただ日本への「フンボルト理念」「ベルリン・モデル」のインパクトは，もしかしたらパレチェク説についての検証材料を提供することになるのかも知れない。つまり,パレチェク説では1910年を境として,それ以前は「フンボルト理念」,「ベルリン・モデル」といった言説は作られていなかったのだから，日本に及ぶことはなかったはずである。そうした言説・用語が登場するとすれば，それは1910年以降のはずである。これは明らかに現在でも検証可能なテーマである。いったい，日本では「フンボルト理念」「ベルリン・モデル」という言説がいつ頃から使用されるようになったのか，さらには「研究を通じての教育」という教育スタイルが，いつ頃から日本に及んだのか，これを検討しなければならない。

まず実態面でみるならば,明治期の日本の大学が,ドイツの大学から大きく影響を受けたことは,明白である。それはいずれも1910年以前にドイツに留学した人々の手によって，新たな教育改革・教育実験として試みられた。日本における「研究を通じての教育」の実験が，もっとも鮮明かつ組織的に行われたのは，1900年から1907年にかけての京都帝国大学法科大学でのことであった。この改革の主導者高根義人は，1896年から1900年にかけて，ベルリン大学に留学した経験を持っている。彼は「ドイツの大学は学問研究所にて，同時にその教授所なり。故にドイツの大学の教授は授業者（Lehrer）にして，同時に研究者（Forscher）たらざるべからず。ドイツの学生もまた受業者にして，同時に研究者たらざるべからず」といった。詳細は繰り返さないが，この期間，京都で試みられたのは，ドイツ型のゼミナール教育であった[21)]。それは日本における最初の大学改革であり，最初の挫折であった。しかし重要な点は，この改革の主導者高根義人は，この改革をいっさい「フンボルト理念」「ベルリン・モデル」として説明したり，正当化することがなかったという事実である。

またちょうどその頃，当時東京高等商業学校の教授をしていた福田徳三は，ドイツ流のゼミナールの開設を試みた。福田は1897年から1900年までドイツのライプチヒ,ミュンヒェン大学に留学し,ミュンヒェン大学在学中，ルヨ・ブレンターノ教授にその才を認められ，論文「日本における社会的経済的発展」を書いて，博士号を取得した。帰国直後の彼は学生に対して「私の講義を金科玉条

として鵜呑みにすることは，私がもっとも嫌うことで，なるべく疑問を喚起し，さらに高度な研究をしようとする意欲を起こすことができれば，私の願いは達せられたことになる」と述べた。そして明治36年（1903）福田は東京高等商業学校に就職する時,「２，３の同僚とともに，ミュンヒェン，ライプチヒなどでの研究室にならって，校長に肉薄して一室を割かせ，図書館から若干の書物を個人の責任で借り出し，形ばかりのものを作った」と回想している。福田はドイツ型のゼミナールを導入しようとしたのであろう[22)]。ただ福田の場合も，高根と同様，これらの方式を「フンボルト理念」「ベルリン・モデル」として説明しようとした形跡は，まったくみられない。

さらにまた1909年から1913年まで,東京帝国大学法科大学の外国人教師を勤めたハインリヒ・ヴェンティヒ（Heinrich Waentig）が導入を試みたのは，明らかにドイツ流のゼミナール教育である。そのために彼は図書室のセットとなった国家学統計学研究室の設計図を残した[23)]。彼は「東京帝国大学における経済学教授法改良意見」を1912／1913年に発表したが，その趣旨は文献資料を整えた国家学統計学研究室（実態は図書室）のなかでの「研究を通じての教育」であった。しかし，このヴェンティヒの試みは，大内兵衛の回想によると，参加者が増えず，長続きせず,「日本最初の演習」という追憶だけを残して姿を消した[24)]。このヴェンティヒもまた，彼の改革について「フンボルト理念」「ベルリン・モデル」といったことは，一言もいっていない。

このように1910年以前の日本では,「研究を通じての教育」,「図書室とセットとなったゼミナール室」といった，当時としては斬新な教育実験が試みられたが，その主導者はいずれも「フンボルト理念」「ベルリン・モデル」といった言説を使って,この改革を主張したり,解説することはなかった。ところがそれ以降の日本では，言説としての「フンボルト理念」「ベルリン・モデル」が登場するようになる。

その当時の雑誌新聞類を筆者が検索した限りでは，フンボルトの名前が最初に登場するのは，1913年（大正２年）６月１日号の「太陽」の「ドイツ大学現今の弊」である。そこではフンボルト，ベルリン大学の名がシュプランガーの名前とともに登場する。またその数ヵ月後の1913年９月22日の「万朝報」は「大学教育は1810年ベルリン大学の創設とともに，一時期を画したとみてさしつかえない。少なくとも科学的自由討究の途が開かれたのである」と報じている。ただこれらは新聞社内で作成された独自記事なのか，学界などの外部からの取材情報に基づくものなのかは，不明である。

つまり1910年以前の日本では「フンボルト理念」「ベルリン・モデル」といった言説抜きで,「研究を通じての教育」「ゼミナール教育」が教育実験として試みられた。そして1910年以降になると，今度は具体的な教育実践を抜きにして，言説としての「フンボルト理念」「ベルリン・モデル」が，さまざまな人々によって語られるようになった。つまり1910年以前と以後とでは，ドイツ・インパクトは明らかに違う。このように日本での展開は，パレチェク説に一つの支持的な証拠を与えているように思えるが，どうであろうか。

さらに，八木浩雄・甲斐規雄の「W.von Humboldt の受容に関する研究」では，国立国会図書館所蔵の「近代デジタルライブラリー」をもとに，明治期の刊行図書のうち,「教育史・事情」の該当する書籍80件を検索した結果，Humboldtへの言及は見当たらず，わずかに「言語学・歴史・文学」

の部類のなかに，若干の書籍を発見しただけだったと報じている[25)]。

シュヴィンゲスは「フンボルト構想は，19世紀末になって，ドイツ語圏ではなく，アメリカで受容された」という。たしかに1870年代以降のアメリカは，大学院というアメリカ独自の制度を作り出し，それを通じて「研究を通じての教育」というドイツ・モデルを取り入れてゆく。これがアメリカを世界の学問の中心地へと成長させる原動力となった（以上はあくまでもスケッチであって，実態はもっと複雑である。詳細は拙著「アメリカの大学」に譲る[26)]）。フォン・ブルッフもまた「フンボルトからの緩やかな決別」という論文のなかで，「近代大学の理念は，ドイツではなくアメリカで受容された」としながらも，それに続いて「ただここから新たな論議が始まる」という一文を付け加えている[27)]。それは日本にとっても同様で，「ここから新たな論議が始まる」。

【注】

1）Paletschek, Sylvia. (2001) Verbreitete sich ein‘Humboldt’sche Modell’an den deutschen Universitäten im 19. Jahrhundert?, in Rainer Christopher Schwinges (hrsg von): *Humboldt International, Der Export des deutschen Universitätsmodells im 19. und 20. Jahrhundert*. この本のもととなった国際会議については，宮坂正英「国際シンポジウム「フンボルト・インターナショナル，19世紀・20世紀におけるドイツ大学モデルの輸出」に参加して」『大学史研究』第16号（2000年）を参照。

2）ベン・ダヴィド（潮木守一・天野郁夫訳）（1974）『科学の社会学』158頁，至誠堂。

3）Moraw, Peter（2001），Universität, Gelehrte und Gelehrsamkeit in Deutschland vor und um 1800, in Schwinges 注 1 参照。

4）別府昭郎『ドイツにおける大学教授の誕生』1998年，創文社。

5）Gebhardt, Bruno (1903) *Wilhelm von Humboldts Politische Denkschriften, 2.Bde*

6）Paletschek, Sylvia (2001)

7）上山安敏（1966）『法社会史』250-252頁。

8）Ben-David Joseph（1977）*Centers of Learning*, McGraw-Hill

9）潮木守一（1986）『ドイツの大学』（講談社学術文庫）

10）Lexis　W.: Die Deutsche Universitäten. Bd. 1, in *Das Unterrichtswesen im Deutschen Reich* (1904).

11）ディルセー（池端次郎訳）（1988）『大学史』東洋館出版社，下巻286頁。

12）Daude, Paul (1887) *Die Königliche Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin, Systematische Zusammenstellung der für dieselbe bestehenden gesetzlichen, statutarischen und reglementarischen Bestimmungen*.

13）von Riese, Bernhard. (1977) *Die Hochschule auf dem Weg zum Wissenschaftlichen Grossbetrieb, 1890-1933*.

14）潮木守一（1975）『近代大学の形成と変容』東京大学出版会。

15）別府昭郎（1971）「ベルリン大学哲学部ハビリタツィオン規定の紹介」『大学史通信』第 4 号。

16）Turner, R.Steve n (1971)‘The Growth of Professional Research in Prussia, 1818-1848 Causes and

Context', in McCormmach, R.S (ed), *Historical Studies in Physical Sciences, 3*.

17）McClelland Charles E,（1980）*State, Society, and University in Germany 1700-1914.*

18）潮木守一（1993）『ドイツ近代科学を支えた官僚』（中公新書，現在　中公新書E-book）。

19）上山安敏他編訳（1979）『ウェーバーの大学論』木鐸社。

20）筆者がこのシュプランガーの論文を読んだ限りでは，パレチェク教授とは異なった印象を受けたが，ここでは割愛しておきたい。

21）潮木守一（1984）『京都帝国大学の挑戦』講談社学術文庫。

22）菊池城司（1999）『近代日本における「フンボルトの理念」：福田徳三とその時代―』（高等教育研究叢書 / 広島大学大学教育研究センター；53）。

23）東京大学経済学部編（1976）『東京大学経済学部50年史』。

24）大内兵衛（1970）『経済学50年（上）』東京大学出版会。

25）八木浩雄・甲斐規雄（2004）「W.von Humboldt の受容に関する研究」『明星大学研究紀要―人文学部―』40号。

26）潮木守一（1982）『アメリカの大学』（講談社学術文庫）。

27）vom Bruch, Rüdiger. (1999) 'Langsamer Abschied von Humboldt? Etappen deutscher Universitätsgeschichte 1810-1945', in Ash Mitchell G. (hg.) *Mythos Humboldt, Vergangenheit und Zukunft der Deutschen Universitäten*.

A Japanese Perspective of the Humboldt's Mythos

Morikazu USHIOGI*

Most standard textbooks pertaining to the world history of universities describe the establishment of the University of Berlin in 1810 as the beginning of the modern university and Humboldt's idea of the University of Berlin as the leading example of a modern research university. Sylvia Paletschek questioned the abovementioned description and asserted that Humboldt's idea and the Berliner model were a result of the University of Berlin's centenary celebrations in 1910. As evidence for her assertion, she argues that nobody was aware of the existence of Humboldt's manuscript on "internal and external structure of the higher learning institution in Berlin" until 1903 and that it lay, unknown to anyone, amidst a bundle of papers.

At the turn of the nineteenth century, Japan sent many young scholars to Germany to study the training system of science and scholarship. Some of them returned home and attempted to implement the German training style by establishing the seminar system based on the principle of the training through research. Professor Yoshito Takane, after studying in Berlin from 1896 to 1900, attempted to introduce the German style of training at Kyoto Imperial University, albeit without the explanation that the new training system was based on Humboldt's idea and the Berliner model. Professor Tokuzou Hukuda, who completed his doctorate from Munich University and studied alongside Lujo Brentano, also attempted to introduce the German style of training; however, he never mentioned Humboldt's idea and the Berliner model. Moreover, Heinrich Waentig, a guest professor from Germany who taught at the Tokyo Imperial University from 1909 to 1913, published a reform plan for the training of economics and began seminar training; however, he never mentioned Humboldt's idea and the Berliner model.

According to my research, thus far, the only mention of Humboldt's idea and the Berliner model has been in an essay in Taiyo on June 1, 1913 in which the outline of Eduard Spranger's speech was published and in an editorial of Yorozuchono on September 22, 1913; both were leading magazines at the time. This suggests that before 1913, several experimental teaching based on the German style by professors trained in Germany were attempted without the mention of Humboldt's idea and the Berliner model. However, after 1913, in Japan, there were frequent discourses on Humboldt's idea and the Berliner model and many standard textbooks pertaining to the history of universities have described these two concepts. In other words, until 1913, the name of Humboldt was unknown to the Japanese and there were no conversations on the Berliner model. This fact could, to some extent, bear testimony to Paletschek's assumption.

* Guest Professor, Obirin University